

# 博士論文審査報告書

## 論 文 題 目

### MULTI-DIMENSIONAL MONITORING AND INTERPRETATION OF GLOBAL ENVIRONMENT'S IMAGES

A case study on the perceived and projected images through  
residents and public media patterns in Odaiba, Tokyo Bay

### グローバル都市イメージの多面的解釈手法の開発

東京湾お台場地区における住民による認知イメージと  
公共メディアによって投影されたイメージの比較を通して

申 請 者

Aya Ibrahim	MOHAMED
モハメド	アヤ イブラヒム

建築学専攻 景観・地域デザイン研究

2020年6月

現代社会におけるグローバル化という現象は、都市の「場所性」に対しても多大な影響を与えている。風土性や歴史性をはじめとする場所の固有の文脈とはかけ離れた、あたかもクローン化されたかのような画一的な空間が世界の随所で再生産され、その結果として「没場所性」が蔓延している。そうした課題認識のもと、本研究はグローバルな都市イメージを多面的に記述し、解釈する手法の開発をめざすものである。

本研究は、「世界都市」のコンセプトが具現した都市として、東京の「臨海副都心」に着目し、特に、グローバルな建造環境に加えて、重要な観光地の性格を持ち、人口統計学的にも外国人居住者比率が高い特徴を有する事例として、「お台場」（東京都港区台場・江東区青海）を分析対象地に選定した。そして、高度情報化社会において、都市計画・都市デザインは「物理空間」と「情報空間」の双方を計画対象としうるとの観点を提示したうえで、お台場の都市イメージを、「住民による認知」と、「公共メディアによる投影」の二側面から詳細に抽出し、描画することを試みたものである。

具体的には、第一に、お台場の「物理空間」に対して、住民による認知イメージ（Residents Perceived Images 以下 RPIs）を通じた「認知空間」、公的メディアに投影されたイメージ（Media Projected Images 以下 MPIs）を通じた「情報空間」という、三つの「空間」を対象としてグローバル都市イメージを把握し解釈する手法を開発すること、第二に、住民認知イメージ（RPIs）とメディア投影イメージ（MPIs）の類似点と相違点を把握し、都市デザインの向上に寄与すること、の二点を目的としている。

本研究は、都市の複層的なイメージ構造の理解に貢献するものであり、「パーソナルスケール」と「パブリックスケール」からなる双方向のイメージ形成プロセスの存在を示唆している点に独自性を有することが認められる。

序章から第2章では、研究の前提を提示している。序章『研究の背景』では、研究の背景、仮説、目的、枠組みについて述べている。

第1章『研究の概要、計画、方法』では、関連する先行研究をレビューしたうえで本研究の位置づけを行うとともに、研究の全体構造、方法に加えて、本研究の都市計画学的ならびに社会的意義について整理している。

第2章『人工環境都市としてのお台場の歴史的レビュー』では、「お台場」の人工的な都市環境が形成された歴史的経緯を概観するとともに、人口統計学的特徴を整理し、事例対象地として「お台場」を選定した理由を述べている。

第3章『住民の心理的アプローチ』では、住民個々人の抱くイメージと「認知空間」を扱っている。対象地内の全ての集合住宅の住民を対象とする日本語と英語によるアンケート調査を実施し、日本人と外国人を含む住民によるお台場に対する認知を心理的に評価した。その結果、日本人と外国人の抱く都市イメージに有意な差があることを明らかにした。

そのうえで、都市イメージ評価データの多変量解析を通して、「立地 (Place location)」、「風土 (Milieu)」、「人間活動 (Human activities)」、「建造環境 (Built environment)」、「文脈 (Context)」という、5つの都市イメージの次元を抽出することに成功した。

第4章『住民認知イメージのパターンと場所の主たる要素』では、お台場に暮らす住民による都市イメージの心理評価を通して、「認知空間」について考察している。まず、前章の都市イメージ評価データにもとづく5つの都市イメージの次元を用いた階層的クラスタ分析によって、住民認知イメージ (RPIs) が6つのイメージパターンで把握できることを示した。また、回答者属性によって住民認知イメージ (RPIs) のパターンが異なることを明らかにし、個人ごとの「認知フィルタ」を通して、同じ物理空間から異なるイメージが生成されていることを考察した。加えて、住民認知イメージ (RPIs) に影響を及ぼす都市環境要素を調査し、要素ごとの出現率が6つのイメージパターンごとに異なることを指摘した。

第5章『メディア投影イメージの傾向』では、「情報空間」の視点から都市イメージを検証するために、お台場について紹介している印刷物をはじめ、バーチャルメディアを含む多様なメディア (ガイドブック、パンフレット、地図、ウェブサイト、オンラインガイド) を用いて、その文字データをテキスト・マイニングにより分析し、メディア投影イメージ (MPIs) の傾向を把握している。

その結果、全般的に、メディアは東京湾に関連する観光要素を強調していることを指摘した。また、ガイドブックがお台場についての一般的な情報を比較的万遍なく表現しているのに対して、パンフレットや地図は公園や自然要素に焦点を当てる傾向があること、ウェブサイトは臨海部の開発可能性に焦点を当てていること、オンラインガイドは景観に焦点を当てていることを指摘するなど、メディアによる差異を明らかにした。

また、メディア投影イメージ (MPIs) データの多変量解析によって、メディアで言及されている要素が「一時的 - 恒久的」、「日常的 - 非日常的」の二次元で把握できることを指摘するとともに、メディア投影イメージ (MPIs) の4つの影響因子を抽出し、さらに、それらを用いた階層的クラスタ分析によって、メディア投影イメージ (MPIs) が9つのパターンで把握できることを示した。

第6章『住民認知イメージとメディア投影イメージの比較』では、住民認知イメージ (RPIs) とメディア投影イメージ (MPIs) のデータを統合し、両者の比較分析を行っている。イメージを統合的に把握するために、住民認知イメージ (RPIs) とメディア投影イメージ (MPIs) の統合データセットを作成し、それに階層的クラスタ分析を適用することによって、傾向を比較分析するための共通の評価基準となる7つの要素パターンを抽出した。

また、住民認知イメージ（RPIs）とメディア投影イメージ（MPIs）を比較した結果、それぞれのイメージ生成に関して、イメージの心理評価に関する「認知フィルタ」を通じた住民認知イメージ（RPIs）の次元と、物理的な建造環境の要素分析に依存した「選択フィルタ」を通じたメディア投影イメージ（MPIs）の次元という、複数の次元を持つことを考察した。

第7章『結論』では、本研究で得られた知見をとりまとめて、結論としている。

第8章『グローバル都市としてのお台場』では、本研究の結論と先行研究の知見とを照らしあわせて、都市イメージの多面的解釈にもとづく計画的対応の可能性と今後の研究課題について展望している。

以上を要するに、本研究は、場所固有の文脈の乏しいグローバルな都市イメージを多面的に記述するための方法論と、その解釈のための枠組みを開発したものである。本研究が開発した都市イメージの記述と解釈の方法は、都市デザインと都市プロモーションを計画的に展開していく手がかりを獲得するために重要なものと評価できる。

これらの成果は、建築学および都市計画学の発展に寄与するところ大である。よって、本論文は博士（建築学）の学位に値するものと認める。

2020年4月

審査員 (主査)	後藤春彦 早稲田大学 教授 工学博士 (早稲田大学)	-----
	有賀隆 早稲田大学 教授 Ph.D. (カリフォルニア大学バークレー校)	-----
	内田奈芳美 埼玉大学 教授 博士(工学) (早稲田大学)	-----
	山村崇 早稲田大学 講師 博士(工学) (早稲田大学)	-----